

られ候。

初節句を祝す

啓。暫く御無音に打ち過ぎ候ふ段、謝し上げ奉り候。就いては、本年は御令息様御初轍にて、さぞさぞ御賑しき御事と御推察、何よりめでたく、恐悦至極にござ候。實は參堂御祝申し上げべき筈なれど、商用多忙にて、差しかゝり離れ難く候ふまゝ、略儀ながら使を以て、お恥しき品ながら武者人形及び鮮魚一聯差し上げ候ふ間、御笑納下されたく、かげながら御令息の御壯健御出世をお祝ひ申し上げ候。早々。

おどろき

恐悦至極

略儀ながら

笑納
出世

右返事

御玉章拜見仕り候。豚兒本年の初節句御心にかかけられ、美しき人形鮮魚など、わざわざお遣し下され、何とも御禮の申し述べやうもござなく、深く御禮申し上げ候。

この上もなし
光榮

豚兒御惠送の人形を對手に、この上もなき喜びに候。なほ明日は何の用意もこれなく候へども、粗酒一献差し上げた候ふにつき、午後より御光來をたまはり候へば、光榮これに過ぎず存せられ候。早々不一。

臺灣に赴任するを賀す

榮轉

いさゝか

やうやく

心事

風土
民俗

啓。本日官報により、貴兄この度臺灣民政局へ御榮轉の趣相知りいさゝか驚き申し候。

櫻に明け櫻に暮れし日本の春も老いて、緑やうやく繁くなり行くのとき、一人鳥なく都を後にして、新土に去らるゝ貴兄が心事を想へば、自ら感慨に堪へざるものこれあり候。

臺灣は、遠く日清の役に於て、すでにわが有に歸せしものながら、未だ依然本國とは異りて、風土も違ひ、民俗も十分に有難き皇化に浴せざる折からに候へば、行政の困難いはずもがな、萬事意の如くならざるべくと存じ候。

さりながら、盤根錯節に逢はざれば、その利器を分つ

腕だめし

輕々し

必ずや

幸福

まことに

ゆるゆる

能はずとか申し候へば、ここ貴兄の腕だめしにござ候。

小生は、その腕だめしの、決して輕々しからざるを思ふとともに、貴兄が新進の頭惱と手腕とを以てして必ずや行政上偉大なる効果功勞を残すを疑はず候。

これ、ひとり該地の發達進歩を見て、土人の幸福なるのみならず、帝國のためはた、われら同窓生のため、この上もなき祝事に候。

この品まことに粗末ながら、小生の微志に候へば、御笑納を仰ぎたく、いづれ御出發のみぎりには、御見送り、ゆるゆる御面談申し上げべく候。勿々。

家督相續を賀す

慶賀

ぬかりなし
維持

さぞさぞ

とりあへず

粗末

拜啓。承り候へば、貴君、今般、御家督御相續相成り候ふ趣、慶賀の至りに存せられ候。

貴君は、すでに中等の教育を受けさせられ、殊に萬事は、御ぬかりなきことなれば、御家運を御維持なさるべきは、勿論、今後ますます御繁盛を圖らせらるゝことは、信じて疑はず、火を見るよりも明にごさ候。

御兩親様にも、さぞさぞ、御安心遊ばされ候ふことゝ、御察し申し上げ居り候。

先づは、とりあへず御祝ひまで。

なほ甚だ粗末には候へど、鯉節一籠、お印までに御送り申し入れ候ふ間、御笑納下さらば、幸甚幸甚。

右返事

啓。尊兄、ますます御清榮賀し奉り候。

さて、この度家督相續仕り候ふにつき、早速御高聞に達し、まことに恐れ入り候。殊に、澤山の御品お祝ひ下され、厚く御禮申し上げます候。

御承知の如く、萬事に不行届の者に候へば、何卒、この後とも、宜しく御指導を仰ぎたく願ひ上げ奉り候。

小生も、堅く家法を守り、ひたすら、家聲を失墜せざらむことを心がけ申すべく候ふ間、御安神下されたく候。

遅れながら、明日午後六時より、いさゝか披露のため、親屬知己四五名相會し候へば、御多忙中、恐れ入り候へ

早速

不行届

ひたすら

披露

ごひに

ども尊兄にもせひに、御來光下されたく、改めて御願ひ奉り候。

先づは御禮を兼ね御案内まで。謹言。

友人の來訪を謝する文

ほんたうに

昨日は、暑さにも拘らず、よく来てくれたね。僕はほんたうに嬉しかったよ。

風情

何の風情もなかつて、まことに失禮した。菓子屋へ三里、酒屋へ五里の片田舎だ。許してくれ給へよ。

興奮劑

さびしい山家に、百姓どもを對手に暮して居る僕には、君のやうな友が、いい興奮劑になる。田舎に一年居れば、野心の焔が消えてしまふ。二年

安樂
むさぼる

を過せば、たゞ安樂の夢をむさぼる。夢に起き夢に眠る。田舎の人は、みんな猿といふ獸のやうに、夢を食って生きて居るんだ。

折があつたら、重ねて来てくれ給へ。

待つてるからね。左様なら。

右返事

いひぐさ

兼好のいひぐさではないが、心合ふ友とさるからさぞと語り合ふほど世にうれしい事は無い。まして眞の兄弟も及ばぬとまでいはれた二人が、三年ぶりで遇つたのだ。

三年ぶり

僕は君の變つたのにも驚いたが、堪らなくうれしか

長尻

こきませる

大自然

不平
だらだら

勝手

った。長尻したのは、改めて御詫して置くよ。

しかし君の御宅はいいね。

やなぎさくらをこきませし都の春の黄昏だなんて、
負け惜しみはいつて、も君の縁から望む、あの大自然
に對しては、三文の價値もないさ。實際いい、實際いい。
君は、だらだら不平をいふけれど、僕は君の現在が羨
しいよ。できることなら、運命の交換がしたい。勝手
をいつてすまない。皆さんへ宜しくお言傳を頼みま
す。

送られて、歸る三里や春の風。失禮。

議員の當選を祝す

いよいよ

選舉

正々堂々
威嚴

美事

多少

平素

德望

中原の鹿は荒れに荒れて、誰人が手に入るかと思は
れ居り候ふに、いよいよ、大兄の弓矢に射とめられ候ふ
由、大慶至極に存じ上げ候。

いつもながら、本道の選舉は、運動激烈にして、内面見
るに忍びざるの醜陋事實の行はるるあるに、一人、大兄
は、正々堂々の陣を張り、侵すべからざるの威嚴を以て
進撃されしこと、物の美事にて候ひき。

しかしながら、腐敗選舉になれたる、本道のことなれ
ば、と多少怪ぶみ居り候ひしに、しかも、最高にて、大兄の
當選なされしは、もとより、大兄が、平素道民の爲に至誠
公平を以て、御盡力下され候ふこと、才識德望、衆を超
えさせらるゝ結果に外ならざるは、勿論なれど、本道の

正義

選舉界漸く革新の時季に至りたるものにして國家のため、賀すべきことに候。殊に正義の旗を打ち振りて赤誠國に殉ずるの士を當選せしめたること、誠に本道の誇りといたすところにて候。

講場

たい、この上は、議場に登りて、謬々の議論をなし、腐敗議員の心膽をうばひ、道政の進歩發達を計られむことを希望して止まず候。

希望す

先づは、別品甚だ輕微ながら、御當選の御祝までに呈上仕り候ふ間、御笑納下されたく候。謹言。

笑納

開店を祝す

かつて御計畫の雜貨商はなばなしく御開店の由賀

さぞかし

し上げ奉り候。

貴下が年來の御希望に候へば、さぞかし御満足のこと、存じ上げ候。

機智

貴下が機智に富める天資を以て、この業を始め候ふ

永久

こと、陶朱猗頓の富利を積むや、疑これなく候へども、現代商人の徳義全く地に墜ち、一時の暴利を見て、永久の利益を算せず、誑詐瞞着不正を行ふを以て、少しも恥とせざる有様にて、國家のため、はた日本の商界のため、まことに歎しき事にごさ候。貴下は、この間にありて、よく抱負を述べ、闇暗なる商界の迷夢弊風を打破せられ

まことに

むことを、切に御頼み申し置き候。

打破す

この品粗末ながら、開店の御祝までに。敬白。

右返事

はや
結構

小生開店の儀は、や御聞きに達し、早速御祝詞及び結構なる品御恵みに預り、有難く御禮申し上げ候。

たゞたゞ

もとより、別段の経験も、これある次第にはござなく候へど、たゞ、正直信實を精神として、營業仕る考に

巨利

候へば、先づは御安心下されたく候。みだりに商界に出でて、巨利を得るをこひ願はむよりは、著々の微利を積むの心算に候。

心づき

なほ、大兄御心づきの節もあらせられ候はば、御教導に預りたく願ひ上げ奉り候。先づは御禮まで。早々不一。

就職を賀す

一、

いよいよ

いよいよ、××新聞社へ入られたさうだね、先づおめでたう。

持つて来い

僕はいつも、さう思つて居た。君の性質は、新聞記者には持つて来いと。

發揮す

これからが君の君たるの所以を發揮して、天分を盡し時だ。

しつかり

新聞記者は、社會の裁判官である。無冠の帝王である。しつかりやつてくれ給へ。

支配す

任官

不審

さてこそ

官海

實地

僕は君の鋭い意氣が必ず君の活動をはなばなしからしむるを疑はない。

意氣だ、意氣だ。意氣は人間の行動を支配する。

二、

大兄かねて度々官途へ任官を勸むる人ありても、ただ笑を浮ぶるのみにて御對手にならせられぬより、日頃不審を抱き居り候ふところ、この度日本銀行へお入り遊ばされしと聞き、さてこそと始めて合點仕り候。

窮屈なる官海よりは、自由なる民間にあつて、大手腕を振ふこそ、大丈夫の本望と申すものにて、大兄の御見識かげながら感服いたし居る儀に候。

げに、大兄が専心研究遊ばされし経済學の蘊蓄を實

まことにまことに

榮達

漫遊

地に應用せらるゝの時と相成りしものにて、大兄の御満足も、さぞかしと、小生までが嬉しいやうの心ちせられて候。まことにまことに、おめでたき限りに存じ上げ候。

さては、この上ながら、御職務御精勵遊ばされ、ますます御榮達あらむことを、祈り上げ奉り候。

いづれ參上改めて御祝申し述べべく候。敬具。

旅行中の御禮

貴地漫遊の節は、一方ならぬ御配慮に預り、厚く御禮申し上げ候。

と、ここまで書いたが後が出ない。

文例

持てあます

厄介

あの時は、流石の君も持てあましたらうて。
妹さんにも、萬事無遠慮で失禮した。
いや、本當に、御厄介になつた。
深謝するよ。御兩親様へは別に手紙を差し上げた。

饗應の御禮

どうも

君。昨夜は、實際失禮したよ。どうも、いろいろ御馳走様だつた。

外交手腕

僕も、飲むまい、飲むまいと思つてたが、君の妻君の外交手腕で、つひつひ、あんなに酔されてしまった。夢中で、何か亂暴でもせなかつたかと、今更心配でならぬ。若しそんなことがあつたら、宜しく御勘辨だよ。

くれぐれも

いづれ

妻君には、くれぐれも、よろしくと、傳へてくれ給へな。
僕は、たつた今起きたばかりさ。
いづれ、お禮には、参上するけれど。左様なら。(午前十一時に)

周旋の御禮

いよいよ
出勤す

紹介

仕合

目下

御蔭様にて、いよいよ昨日より、出勤すること、相成り申し候。
社長も、君からの紹介なりと聞き、心ちよく承諾され、實に有難き仕合に存じ奉り候。
早々御訪問の上、厚く御禮申し上ぐべき筈なれど、目下、何かと準備もこれあり、心に任せず、失禮ながら、二三

猶豫

日、御猶豫下されたく候。

先づは取り敢へず、一書を以て、御禮まで。早々敬具

會葬を謝す

わざわざ
會葬

安達君昨日は、あんな雨降りだったにも拘らず、わざわざ、御會葬下さいまして、誠に有難う存じます。

随分

よく弟が、君が訪ねて来た時に、行軍將棋をしよう、しよう、と随分、困したものだつたね。

さぞ

今は、あの想ひ出も、仇とはなつたけれど、あつして君に送つてもらつて、さぞ地下で、嬉し涙を浮べて居るところでせう。

いろいろ
ゆつくり

いろいろと混雜して居るので、御禮には、後で、ゆつくり上りますが、先づは取り敢へず、御禮まで。左様なら。

雨具を返すに添へて

大多忙

昨日は御多忙中を、參上御邪魔仕り、殊に大變なる御馳走に、預り、厚く御禮申し上げ候。

歸宅には、俄の大雨とて、困り入りしを、雨具までお貸し與へ下され、御蔭を以て、無事に歸宅仕り候段、有難く存じ奉り候。

返却

只今、使に持して、御返却申し候、ふ間、御受け取り願ひ上げ候。

知人

いづれ、その内、改めて、御禮に參上いたすべく候。別品、林檎一籠、北海道の知人より贈らせしもの、失禮

文

例

風味

ながら、御裾分けいたし候ふ間、御風味下されたく候。敬白。

歳暮の贈物に添へて

師走

ゆづの葉の色いよいよ緑に、おしつまりし師走の風のいと膚寒く感せられ候。今年も實に、餘すところ二日とは相成り申し候。

年の瀬を越すいそがはしさ、さぞかし御多忙にあらせられ候ふべし。貧乏閑なし、小生宅など、眼の廻る程にごさ候。

引立
手許

いさゝか、舊年の御引立に報いるのお印として、北海道鮭二尾お手許へ差し上げ候ふ間、先づは御笑納下さ

れたく候。敬具。

梅を贈る

開け放し
裸足

ちようと去年の今頃だった。君と二人で會飲した時に、開け放した庭に、咲いた、白梅の一輪が、泥にまみれて居るのを見て、妹さんを、さんざいぢめ扱いて、たうと裸足で拾はした君を思ひ出した。少し遅咲きではあるけれど、僕の庭には、ほふ梅の一枝を贈る。

往日
憔悴

あゝ、君今や病んで、往日の元氣なく、僕また憔悴、昨の勇なきを何如。

想ひ出多き白梅の、今は仇なれ、これなくば。匆々。

果物を贈る (北海道から)

いはゆる
いかにも
びかびか
大變
まつ盛り

去年の秋上京した時に、いはゆる東京の林檎なるものを見た。いかにも光って美しい。うまいだらうと思つて食つて見たら、何のことはない、糠を食つてると同じ事だ。あれで一個が三錢だの、四錢だのするんだから、驚かざるを得ない。
君、これは北海道の林檎だ。東京の糠とは違ふ。びかびか光つては居ないけれども、味はうまいよ。北海道では、これが七つばかりで八九錢のもんだ。いくらでも送りたいが、その送るのに大變だ。こつちは、目下、林檎のまつ盛りだ。

ちようど
すらりと
到底
一つ家

野へ出て見るとね、畑といふ畑、右も左も、この紅い林檎が、黄金のやうに成熟して、今にも落ちさうに、夕日に榮えて居る。
花が落ちて、漸く小さい果實になる時に、新聞紙の包をかぶせてしまつて、熟するのを待つて、それを除る。蟲をよける爲だ。
僕の畑にも、澤山ある。
ちようど僕の居間の障子を開けると、すらりと、こんなのが並んで居る。あくまで蝦夷式な高い山を背景とした、その景氣は、到底、東京では見られぬ。
山の中の一つ家だから、友といふものはない。けれども、縁側の柱にもたれて、暮れ行く秋の日を眺めなが

ら、琵琶でも對手にして居ると、年の暮るゝも知らずに居るよ。

これは、今食ふ方だ。秋林檎といって、冬になるまでとつて置くのも、もう少しでできる。近いうちに、その方を送る。

君の父上母上、姉さんにも宜しく。

手土産を贈る

啓。小生、この程より、公用を以て、東北地方へ旅行罷り在り候ふところ不在中は、毎度御見舞を蒙り候ふ由御親切深く謝し上げ奉り候。昨日午後九時の列車にて、無事歸宅仕り候ふ間は、いかりながら、御安心下され

公用
不在中

名産

御笑納

御約束

保険

たく候

別包は、東北地方の名産にて、かの地にて求め候ふもの、名物にうまさものなし、つまらぬものには候へども、わづかばかり御目にかけて候へば、御笑納下されたく候。先づは歸宅のお知らせまで。不一。

種物を贈る

かねて御約束して置きました、朝鮮朝顔の種、只今弟に持して差し上げましたから、御受け取り下さいませ。一粒選に選んだのですから、發芽生育の點は、兄弟二人で保険を附けます。

種を下すまでは、なるべく乾燥の場所に御置き下さ

どうせ

い。
どうせ種を播くには私が参りますけれども。左様なら。

手傳を頼む

無人
申し兼ね

啓。昨日その節より、秋季清潔施行を命せられ候ふ處當方にては、御存じの通りの無人にて、頗る困難いたし居り候ふ間甚だ申し兼ね候へども、一日だけ御手傳下されたく願ひ上げ奉り候。早々不一。

茶を贈る

違者

その後、伯父様には、ますます、御達者にあらせらるゝ

無事

片附く

精選

嗜む

心細し

手製

ことゝ存じ上げ候。小生方も、皆無事、今年茶の收穫も、昨年の約二倍増の成績にて候ふ間御喜び下されたく候。昨日漸く一番茶を一片附け、少しく暇に相成り候ふまゝ、妹と二人にて、特に伯父様へ参らせむとて、精選したる玉露、本日小包を以て御送り申し候。當地に御在住の節には日向干しつゝ、自ら仕上げられて、よく父と共に、お嗜みながら御話いたし居られ候ふが、それも、これも、今は悲しき想ひ出にて父は逝き、伯父様は遠くに移られ、本當に心細く、毎日のやうに妹と御噂ばかりいたし居り候。われら二人の心を籠めたる、手製のこの茶、お召し上

らるゝ伯父様の御顔眼に見ゆるの心地して誠に、お懐しう存じ候。

伯父様もさびしくさびしく、その日を送る兄妹の幼き姿をお浮べ下されたたく候。

先づは、ちよつとお知らせまで。左様なら。

右返事

良好

收穫も良好だとのこと、お祝申し上げ候。

いちらし

本日は、うれしき心をこめての手製の玉露有難く頂戴、二人の心、いちらしくも涙の種に候ふよ。

早速娘にいれさせて、味ひ候。

老年に相成つて、毎日これといふ仕事もなき折柄、こ

賜物

れ位嬉しい賜物は、またとこれなく候。

今更

お前たちのお父さんも今二三年生かして置きたかつたと、今更思ひ出され候。

理想實現

しかし、それは悔んでもかへらぬ事、この上は、兄は妹を、妹は兄をと、ともども力になつて、お父さんの残され候ふ茶畑に、お父さんの理想を實現せられなば、これがお父さんへの、せめてもの孝行に候。その上につき相談あらば、いつにても一臂の力を惜まざるべく、くれくれも、この後とも、一層出精のほど祈り候。勿々。

一臂の力

義捐金を贈る

拜啓。貴社ますます御榮昌賀し奉り候。

ますます

黙し難し
罹災民
振り出す

御引立
御申付

さて、今般の北陸地方海嘯の慘狀酸鼻を極むる由貴紙にて承知いたし、同情に堪へず、且つ同じ島根の同胞として黙し難く候ふまゝ、甚だ輕少には候へども、金五圓也、誠心を以て、同地罹災民へ呈したきにつき、御手數恐れ入り候ふも、右送附方御世話に預りたく、小爲替を以て振出し候ふにつき、然るべく、御取り計ひ下されたく、御願ひ申し入れ候。敬白。

仕立物を届く

啓。毎度の御引立有難く存じ奉り候。就いては先日御申付に相成り候ふ秩父縞御羽織漸く出来上り候ふにつき、御届け申し候ふ間御改め御受け取り下されたく候。不一。

學資金を送る

お前が上京してから、もう二箇年にもなる。それに、毎月十八圓づつ續けねばならないから、なかなか苦しい。だから、しつかり勉強してもらはなければ困る。正夫も今年は中學に入學するというて居る。故郷のことは心配する必要はないが、たゞ、出来れば、儉約して勉學してくれ。(父より) 着いたら、すぐ返事を出せ。

なかなか
しつかり
心配す
儉約

右返事

本月五日附御送り下され候ふ學資金正に拜受仕り候。

申すまでもなく、儉約に儉約を重ねて、日日の學業怠りこれなく候ふまゝ、何卒御安心下されたく候。

又、弟こと中學に入る由なるが、まことにめでたく、東京の兄より、

一生懸命

一生懸命に勉強せよ。

と、申せし旨御傳へ下されたく候。

東京は、向島の櫻も盛との話に候へど、未だ暇なくて一度も参らさず候ふ間おたよりもいたし難く候。

先づは、御恵みの御金拜受の御禮まで。早々不一。

寫眞を送る

一家揃うて寫した寫眞が、やうやうでき上つたから別封で送つた。缺けてるのはお前一人だ。

かはいらし

どうだ、お芳がかはいらしくなつたらう。

みんなは、この通り、達者過ぎる位だ。お前體を大切にして勉強せなければいけない。

避暑す

今年も、また歸んで避暑するなんて、どこへ行くんだ。

毎年同じやうな真似ばかりしてゐるに、少し遠い方へ出掛けたらどうだ。お前も、書生さんで暮すのも、この年一年だ。社會へ出ると、そんなのんきな事はできな

のんき

旅費

いから、今年は旅費も十分送つてやる。

家政 厄介

美枝も、もう年頃なので、嫁にほしいといふところがあつたら、嫁入さしたいと思ふが、どうだ。お前が卒業して歸るまで、家政を手傳はせようかと思つてゐる。母が早く美枝かお前の厄介になりたいといつてるぞ。どうする。(兄より)

右返事

みんなよく撮りましたね。

兄さんの髯も、大分立派になりました。

芳ちゃんが大變大きくなった。歸宅すると、僕も、叔父さんと呼ばれるんですね。

良縁

美枝も、それゝ良縁があるなら、嫁づけた方がいいですよ。

二年ぶり

寫眞を見たら、急に、故郷へ歸りたくなつたから、今年は旅行をやめて、二年ぶりに戻ります。

卒業

お母様へも、この事を傳へて下さい。その代り、兄さん、旅費は卒業してからの洋服代に廻してもらひますよ。

寫眞をもらひに

わざわざ

この暑いのに、わざわざ、妹を君の許へ使にやる。妹が嫌だといふので、

『日に焼けて黒くなるからだらう』

悪口

承諾す

古哲

まさか

と悪口いつたら、

『さう思はれては残念だわ』

と到頭行くことに承諾した。

外でもない。

君の寫眞が昨夜できたらう、バナマをかぶった全身

が、あれを一枚くれ給へよ。明日學校で願はうかとも

思つたが、先んずれば人を制すの古哲を思ひ浮べて、か

くは妹を使に出したわけだ。

まさか無いとはいはれまい。

右返事

どこから、寫眞ができたなんて聞いて来たんだ。耳

約束

たうとう

見廻る

の早い奴だな。

あれは約束がしてあつたから撮したのだ。

が、妹さんの使では、空手で返すわけにも行くまい。

し方ないから進呈する。

あゝ、たうとう、寫眞を一枚してやられた。呵々。

預り物を届く

留守中は、女ばかりの家族、度々御見廻り下され候ふ

由深く謝し上げ奉り候し。

本日無事歸宅仕り候ふ間、憚りながら御安心下され

たく候。

就いては、過日上京中、××會社御部に参り候ふとこ

通勤

わざわざ

ゆるゆる

取り込み

安著

ろ、かつて、貴店に御奉公これあり候ふ吉太郎殿右御部に
 に通勤罷り在り小生にも種々御便與を與へ下され候
 なほ、歸宅の當日、わざわざ小生宿元へお訪ね下され、
 別封貴家へ御届け下さるやう、依頼され候ふにつき、只
 今使を以て差し上げ候ふ間、御受け取り方願ひ上げ候
 いづれ小生參上ゆるゆるお話し申し上ぐべく候へ
 ども、目下取り込み中につき、失禮ながら、略儀亂筆を以
 て申し送り候ふ不一。

依頼せられたる買物を届く

昨日午後無事安著仕り候
 不在中は、いろいろ御配慮に預り有難く深謝し奉り

候

出發

さて、小生出發の折、御依頼の買物、
 一、法律大辭典 金七圓也
 一、洋服一著 金十一圓也

右買ひ求め來り候ふにつき、御届け申し上げ候ふ間、御
 改めの上御受け取り下されたく候

持參
 なほ、御あづかりの金子拾九圓より、買物金合計十八
 圓を差し引き、餘分金一圓を使ひ、持參いたさせ候ふに
 つき、これまた御受け取り下さるべく、且つ洋服の儀は
 賣揚證にも書き入れの通り、縞柄御氣に召されずば、い
 つにても引き換ふる約束に候ふ間、左様御承知これあ
 りたく候。頓首。

引き換ふ

仕合

註文

著荷

萬端

見本を送る

毎度御引立を蒙り、御蔭を以て、日増に繁昌仕り有難
 き仕合に存じ奉り、深く御禮申し上げ候。
 就いては、兼ねて佛國パリへ註文いたし置き候。ふ
 ところの、同地流行の、新洋服柄地、昨日の郵船にて著荷
 仕り候ふにつき、別封見本差し上げ候。間多少に拘ら
 ず、御用仰せつけ下されたく、伏して題ひ上げ奉り候。
 なほ裁縫仕立方萬端も、一層注意いたすべく候。
 早々敬白

忘れ物を届く

只今は、何の御愛想もこれなく、失禮仕り候。御歸り
 の後にて、御敷きの座布團の下に、この煙草入、これあり
 候。ふが定紋により、確に貴兄の御品と存じ、かくは使に
 もたして差し上げし次第、御改めの上、御受け取り下さ
 れたく候。
 先づは取り急ぎ。

右返事

いろいろと御馳走に預り、深く御禮申し上げ候。小
 生歸宅、煙草入、忘却のことを思ひ出で、明日にて改め
 て御禮かたがた、参上頂戴仕るつもりにて居り候。ふと
 ころ、御親切にも、御使お遣し下され、深謝し奉り候。皆

御愛想

定紋

いろいろと

頂戴

例文

々様へもよろしう御とりなし願ひ上げ候。頓首。

送致物の著否を問ひ合す

日まし

發送

啓。貴店日ましの御隆盛大慶のいたりに存じ候。

さて去る三日汽船満州丸に托して鹽鮭五十尾發送
仕り候ひしに、未だ著荷の御報知これなきは如何なし
たる次第に候ふや。

すぐさま

御照會

途上別段の異變ありし様子も見えず、殊にいつもす
ぐさま御報ある貴店にして、すでに二週日に及べるこ
とにて、何となく気がかりにつき、念のため一書を以て
右御照會申し上げ候。早々。

右返事

確に

少々

かたがた

深更
迷惑

啓。御照會相成り候ふ鹽鮭の儀、去る六日確に當方
にて受け取り申し候。

早速御報知申し上ぐべき筈の處、少々家内に取り込
みこれあり候ふため、今日明日と思ひつゝも、今日に至
り候ふこと、何とも申譯これなく、改めて謝し上げ奉り
候。

先づは御詫びかたがた、御回答まで。早々。

遺失物を問ひ合す

啓。昨夜は深更まで雑談、御邪魔申し上げ、御迷惑の

程今更恐れ入り奉り候

さて申しかぬることには候へども今朝に至り、つまらぬものながら煙草入みえず、歸宅の途中にて取り落せしものとは存じ候へども、若しも貴宅に打ち忘れはいたさうりしかと念のため、ちよつと御伺ひ申し上げ候。早々。

難船を問ひ合す

手綴
ちようど

御令息太郎君が十八日には當地着との御報でしたから、學校の方も萬事手續をすまし、宿もちようど、私の下宿に空いた部屋がありますから、心待ちに待つて居ますと、今朝の新聞電報には、金が崎沖の難船として、十

出帆す

心配

亂筆

大變

研究

五日に、御地を出帆した由書いてありました。

太郎君は、あの船には乗り込まなかつたのですか、甚だ心配です。大至急御返事を願ひ上げます。

先づは取り急いで居りますから、亂筆で失禮します。左様なら。

害虫の驅除を子に問ひ合す

啓。この頃、村のそここゝに、少からぬ螟蟲が発生して、みんな困つて居る。宅の田地にも大變なものだ。何とかしやうのないものか。

お前は、かねてから學校で害虫の研究をして居るといつて居たが、みんなも、それを知つてお前たづねてや

試験

一同

うつちやる

つてくれといふんだ。

この頃は試験だといふから忙しいだらうが詳しく手紙に認めて送つてくれ。

村一同の心配故一日も早くな。

『なあに、またおやちからだ』なんて、うつちやって置いては困るぞよ。

二郎も、母も、みんな達者だ。

アラビヤ種の牝馬を一疋買ひ入れた。

石鹼の試験法を問ふ

兄さん。

家で、姉さんが二三日前に、二三種の石鹼を買つて來

たけれども、どれもこれも悪いのばかりで、し方がありません。

姉さんが、だまされて買ったんです。

私が一つ、この品質不良の説明をして、姉さんや、父さんを驚かしてやりたいから、兄さん、内所で、簡単な試験法を教へて下さいな。

大學では、もう、とうに、こんなことはやつたでせう。

ね。ね。

姉さんは、近頃一生懸命で、小説を書いて居ますよ。

兄さん、見たでせう。萬朝報で『春かせ』つてのが、つひ

この間一等を取つて居たのを。

あれは姉さんですよ。

お蔭で私も、大變におごつてもらつた。

どれもこれも

品質

簡單

一生懸命

大變に

文例

汽船出帆の時間を問ひ合す

出帆
廣告
至急

拜啓。今日神戸へ向け出帆の山岸丸出帆時刻×新聞によれば午後十時とあり、○新聞によれば同十二時との廣告これあり候ふが、いづれが正しきものにや。至急御返事下されたく、この段御尋に及び候。草々。

右返事

解纜
申譯

御手紙拜見仕り候。御尋ねの趣は、×新聞の方正しくして、本日午後十時確に解纜の運びに候。右は全く弊社廣告部員の十時出帆を十二時として、掲載方を依頼せし誤にて、御心配相掛け誠に申譯これ無く候。

先づは取り敢へず御返事まで。頓首。

米の相場を問ひ合す

まことに
米價
おひおひ
少々
手放す

雨又雨と打ち續き、まことに氣もめ入る思いたされ候ふが、それよりも氣にかゝるは、米價の事にござ候。新聞紙上には、右、おひおひ騰貴の模様とこれあり候ふが、果して事實に候ふや。しかして、今日の相場は幾程のものに候ふや。實は小生少々持米もこれあり、相場によりては、手放したくとも存じ居り候。貴兄は、斯道に御出入のことなれば、詳しく御存じのこと、書面を以て、尋ね上げ候。至急御回答下さらば

幸甚。頓首。

右返事

實際

ごんどん

躊躇す

この頃の空には、實際弱りましたね。

米のことは昨日までは、ごんどん上る一方でしたが、

今日あたりは、いづれも躊躇して居るやうです。例の

大將、賣りに廻つてゐる爲でせう。

昨日から見れば、玄米は、一合安となつて居るところ

ですから、今賣り出しは、止めた方が、良いやうに思はれ

ますよ。

ここが、辛抱のしどころですね。

先づは御回答まで。頓首。

辛抱

身元を問ひ合す

面目

出精

手不足

確實

手

久しく、御無沙汰に打ち過ぎ候ふて、面目次第もこれ

なく候。その後如何にお暮し遊ばさるゝや、ますます御出精

のことゝ、蔭ながら御喜び申し上げ居り候。

さて、この度、御地南町に住む、中川彦一と申する青年

を、私方事務部へ、御周旋下さる向、これあり、當方も、手不

足の折から、早速雇ひ入れたくとは存じ候へども、何分

にも御存じの如き職業につき、餘程確實なるものなら

では、雇ひ入れ難く、打ち案じ居り候。

幸貴家とは附近のことに候へば、誠に御手数敷恐れ入

相成るやう、預め御願申し置き候。草々。

右返事

父への御貴翰、小生代つて、披見仕り候。

昨日は、わざわざ御光來下され候。由、失禮申し上げ候。

候。

商用

歸宅

折角

勝手

就いては、愚父儀、昨夜も外泊いたし候。未だ歸宅仕らず、多分商用多忙の爲と考へられ候。御大人御申越の時刻までには歸宅仕るべくとは愚考候。折角御來駕、無駄足に相成り候。御氣の毒の儀に候へば、歸宅早々、當方より貴宅へ伺はせ申すべきにつき、勝手ながら、それまで御待ち受けの程、御願申し候。

右御差支、これあり候は、使の者に御返事下されたく候。先づは用事まで。不一。

忘物の送致を依頼す

厚志

恙なし

整理

よくよく

投宿

謝し奉り候。

過般、御地滞在中は、種々御配慮に預り、御厚志の段、深小生こと、幸に海陸恙なく、昨日午後六時、無事安著仕り候。ふ間、憚りながら、御放心下されたく候。就いては、歸宅早々、荷物の整理仕り候。ふところ、どうしても、柿屋、縞反物一反、不足にて、よくよく考ふれば、いづもながらの粗忽者、投宿の旅館、右側戸棚の中に相忘

れ候ふこと、氣附き申し候。

まことに、まことに恐れ入り候へども、この手紙御持
參ちよつと、あの遠州館まで御出で下され右品小包を
以て御廻送下さるやう頼み入り候。
勝手至極には存すれども、日頃の御懇意に任せ、御迷
惑の儀をも願みず、書面を以て、願ひ上げ奉り候。敬具。

添削を乞ふ (先生へ)

先生、これは私が昨日の晩、ちようど、紅い燈が搖ぎ出
した頭から家を出て、さびしい街々を縫うて歩いた感
想を、偽らず、その儘に、露骨に書いて見たものです。
まる切りなつては居ませんけれど、恥しさを堪へて

ちつと

懇意

ちようど

露骨

添削

わが儘

趣味

いづれ

ますます

先生のお眼に掛けます。

どうぞ、御添削下さいませ。

私は、この頭、こんなわが儘な種類のものばかり書き
たいし、讀むにしても、こんなものには趣味が湧くんで
すが、頭惱の修養をする上に於て、宜しくないでせうか。
それとも、十分に味つて置く方が、創作の爲に必要でせ
うか。序ながら、お尋ね申し上げます。

明晩、いづれお伺ひいたします。左様なら。

壁書の揮毫を乞ふ

先生、ますます御清適賀し奉り候。
小生方、かねて新築中の別荘、昨日、どうやららかうやら、

執筆

落成仕り候ふに付いては、洋式應接室の壁畫誠に恐れ入り候へども、先生に御執筆願ひ上げた、最も畫面は高さ六尺幅六尺のところ二面にて、できることならば天井裏の裝飾も御願したくと存じ居り候。

差支

如何なものに候ふや。御暇にまかせられて御差支これなく候ふ間、せひにもと申し入れ候。

面談

いづれ御面談の上、詳しく申し述べべく候。先づは御用談まで。早々不一。

英學の教授を依頼す

不幸

拜啓。不幸にして、未だ拜眉の榮は蒙らず候へどもかねて御芳名を耳にし、羨慕に堪へず存じ居り候ふと

芳名

大賀す

蒲柳の質

本人

突然

左右

ころ、ますます御清祥に渡らせられ、大賀し奉り候。就いては、小生愚息桃一事、今年四月漸く小學全科を卒業いたし候ふにつき、中學へもと心づき候へども、日頃蒲柳の質にて、醫師の勸告により、手許に置きながら何かな勉強いたさせたくと思ひ、本人にたづねしに、英學を専攻したしとのこと、先生御暇もあらせられず、恐多くは存じ候へども、夜間なりとも、少々づつ御教授に預りたく、突然ながら、失禮をも省みず、書面を以て御願申し入り候ふ次第御許し下さるやう、祈り上げ奉り候。右御左右御伺ひ申し上げ候。草々頓首。

右返事

文例

御玉章拜見仕り有難く存じ上げ候。

御令息英學御勉強なされたき由にて、愚生へ右教授方御依頼これあり候ふも、愚生とて、深く研究いたしたること、とてもこれなく、唯氣まぐれの學問にて、到底御教授など仕ること覺束なく候へど、ともども御勉強の御つもりにて、御出で下さるならば、當方一向差支これなく候。

何日よりなりと御都合次第御遠慮なく御遣し下されたく、先づは御返事まで。拜復。

乳母の周旋を頼む

荆妻逝去の節は、一方ならぬ御配慮に預り、深く謝し

一方ならず
都合
ともども
氣まぐれ
依頼

奉り候

就いては、その後、幼兒を抱へてまことにさびしく消光罷り在り、小生は何事もこれなく候へども、幼兒をコンデンスミルクなどにて、育つること、實に不憫に感せられ、殊にミルクにて、養育せるは、成人の後、身體虚弱の者多き由を承り候ふ間、良き乳母もがなと心あたりを方々聞き合せ候へど、未だにめつかり申さず、困り居り候。

もし、貴家御縁邊などにて、然るべき者、これあるまじくや、御聞き及びも候は、御周旋の程、偏に願ひ上げ奉り候。當方の望として、別段これなく候へども、なるべく、田舎

消光
不憫
心あたり
縁邊
周旋
田舎出

出にて、身體壯健の者宜しく存じられ候。
先づはお願まで。不一。

右返事

同情

御手紙拜見、御同情申し上げ候。

萬事

就いては、永らく拙宅出入の者にて、先般小兒を失ひ候ふものこれあり、早速御趣申し入れ候ふところ、萬事宜しくとの返事に候。

至極

右の者は、血統の儀は、小生保証仕るべく、元は相等なる生活を營み、學問も普通は修め居り候ふにつき、貴君方には、至極宜しきやう考られ候ふが、如何のものに候ふや。

御足勞

明日午後、小生宅へ参るやう申し附け置き候ふ間、同刻、貴君も拙宅まで御足勞、一應御眼通しある方、宜しからむと存せられ候。

その上にて、給金の儀は、小生しかるべく御周旋申すべく候。先づは用事まで。不一。

自著の批評を頼む

處女作

別封小説『山あらし』は、若い私の處女作です。藝術品

理想

としての價値のないのは、自ら認識して居るが、これは私の理想が書いたのではない。私の財布が書くべく命じたのであることをいって、御手やはらかなる君の批評をお願ひする。

御手やはらか

文例

保證を頼む

ますます

配慮

通知

親密

捺印

あらあら

啓。貴兄ますます御多祥の段、賀し奉り候。兼ねて、いろいろ御配慮を蒙りし弟儀、本日漸く、入學許可の旨、通知相受け候。

就いては、在學證書差し入れにつき、その保證人は、市内在住の人ならはとのこと。小生市内には貴兄より外に、親密なる者も、これなく候ふまゝ、甚だ申し兼ね候へども、一つ御捺印下されたく、勿論御迷惑相掛け申すやうのこと、契つてこれなく候ふ間、この儀は御放心下さるべく候。先づは、あらあら御願まで。不一。

缺席届を頼む

どうぞ

安心

まごつく
かはいさう

君、この缺席届を、どうぞ學校へ出してくれ給へ。病氣と書いてあるけれど、病氣ではないんだから、御安心下さい。

實は、今日はね、朝鮮の兄夫婦が、おそろひで、休暇で歸つて来るのさ。何しろ、こつちへ移つてから、始めて歸るんだから、停車場で、まごついたりしては、かはいさうだから、迎ひに行つてやらなくちゃならないのでね。頼むよ。

養子の周旋を頼む

文

例

おひおひと

ほとほと

素朴

羨望

御周旋

拜啓。若き頃は、かつて、こんな事を、思ひ浮べたることこれなく候ひしが、寄る年波におひおひと行末さびしき心ちせられて、今更子なきが無念に候。よき養子もがなと、親族は勿論、親族の又その親族までも、相たづね候へど、いづれも家附の者にて、望むを得ず、ほとほと、困却仕り候。尊大人の地方は、戸數も多く、且つ、風俗素朴にして、子弟みな、學を修め、業を勵む由、かねて承り居り候。かゝる處にこそ、よき青年は生るゝものにて、小生、羨望に堪へず候。

若し十五六歳位にて、貴眼に入るの男子これあり候は、わが家の貧を厭はざる者と、養子縁組の儀、御周旋

に預りたく頼み上げ候。

勿論、小生方貧困には候へど、相當なる教育は仕るべく候。

先方には、小生方より、別しての希望もこれなく、たゞ父母に従順にして、正直、まじめなれば、澤山にごさ候。日頃御交際、廣き尊大人なれば、御見かけ、おして御願申し上げ候。ふ次第、御賢察の上、萬事宜しく御骨折下さるやう、願ひ上げ奉り候。謹言。

わが子の監督を頼む

啓。かねてより、申し上げて置きました、が、愚息三郎、家内相談の上、いよいよ近日、上京させることになりま

從順
まじめ

御骨折

いよいよ

文
例

經驗
わがまゝ

迷惑

御指圖

血氣

した。

けれども、子には甘き親の常ながら、心配でなりませ
んのは、本人は、これまで、當村を出でて、他郷の月を眺め
し、經驗もなく、かつ、わがまゝに育つた者ですから、上京
しても、満足に、勉學し得るや否やといふことです。

幸、貴兄御在京の事ゆゑ、御迷惑でもございませうが、
萬事の監督をお頼み申したく、家内一同、お願申して居
ります。

どうぞ、父兄に代つて、十分御指圖、御教導下さいませ
んか。

青年血氣の頃は、わき道へそれ易いものですから、こ
ちらでも、それが心がかかりでなりました。この邊御推

察下さいまして、よろしう願ひます。

亂筆ながら、本人に代りて。(父より)

弟へ訓戒を頼む (兄より)

内々

内々お手紙でお願ひ申し上げます。

外のこともありませんが、弟のことです。

御承知の通り、弟は實際學校の方もよく勵んだし、暇
ある時は、家事の手傳などして、兩親への孝行もして、自
慢のやうだが、かつては君からお賞めの言葉を、いた
いたこともありました。

ところが、近頃どうしたものか、親のいふことなどは
何とも思はず、勉強はせず、くだらない小説など讀んだ

家事
自慢

くだらなし

文

例

心配す
馬耳東風
もてあます

悪し様
尊敬す

篤と

訓戒
懇意

ゆるゆる

無音

り酒を飲んだり煙草をふかしたり手のつけられない者になりました。

兩親も心配しますし僕も度々叱言はいふんだが馬耳東風で知らぬ顔をして居る始末。もてあましてしまひます。

何か原因もがなとあれこれ詮索もして見たが別段のこととありません或は折折出入する友だちからの悪感化ではあるまいかとも思はれます。

僕だつて血を分けた弟のことを悪し様にいふのは好まないけれども弟は誰よりも君を尊敬して居るです。すから君にこの事實を訴へて御力を借りたいのです。

参上篤とお願するのですがちやうと今日は午後から弟が君をお訪ねするやうな話をして居たからとりあへず亂筆で御願ひ申し上げます。

弟が御邪魔に上りましたら誰から聞いたともなく篤と御訓戒下さらば有難く存じます。

日頃の御懇意にまかせ御迷惑ながら御頼み申し上げますがどうぞ僕の心中を御推察下さい。いづれゆるゆる御禮に上ります。左様なら。

逃亡人のことを伯父に頼む

暫く御無音に打ち過ぎまして誠に申譯がございません。伯父さんお變りはありませんか。お伺ひ申し上げます。

文例

番頭
突然

正直

ごまかす

とにかく

當方

就いては、かねて伯父さんがお遣し下さいました私の店の外廻り番頭の幸吉が、昨日の朝突然出かけた切り、未だに歸店いたしません。

別段何も過失があつた譯でもなし、日頃から正直で堅い男のことですから、掛先御得意をごまかしたやうなこともないと思ひますが、とにかく從來他の店員とは違ひ、悪所通ひどころか、外泊したこともない者ですから、氣に懸つてなりません。

若し伯父さんのところへでも立ち寄りましたら、當方の意を傳へて、すぐ歸らせるやうにして下さいませ。お願ひ申し上げます。左様なら。

金子借用を願ふ

ばかに

手許

來春

伯父さん、お願ひがございます。

それは、今度山林の賣物が出て、それが又ばかに廉價なんです。ですから、買ひ取りたいと思ひますけれど、只今手許にある金が、八十圓程不足なので、困つてしまひました。

來春三月までには、必ず御返還申しますが、伯父さんのお手許中から、右不足金だけ、どうぞ、お貸し下さるわけには、行きますまいか。

あの山林を今買ひ入れておくと、孫末代まで寶の山だらうと思ひます。

文

例

先方

先方でも手ばなしたくはないのですが、せひ金が入用の爲し方なく賣り拂ふらしいのです。

参上

どうでせう。お願できないでせうか。今晚いづれ参上して、詳しくお話もし、お願もいたします。取あへず、手紙を以て、大至急お願ひ申して置

大至急

きます。左様なら。

上京せむとして

光陰

拜啓。歲月に關守なしとか、光陰矢の如しなど、陳腐のこと、聞き流したる身の上にも、事實は適切にあらはれて、雨風につけ、おもひで多き母校と、永久に別るゝ時とは相成り申し候。

おもひで

こころも

一枚の卒業證書を手にして、歸る路上の感、喜愛、こもごも胸に溢れて、さまでに嬉しき思にもあらず、たゞ、さし迫りたる前途の暗雲を拂ふべく、苦慮いたされ候。

選定す

兩親は、小生の欲する學校を選定せよと申し候へども、常日頃は、その束縛多きなど、不平をいひ居りながら、

不平

かくいはるれば、さて徒に胸を躍して、行先に迷ふ始末に候。試験に就いては、相當の用意も仕り候ひしも、目的の如く、果して入學し得るや否や、五箇年間試験を味

やはり

ひたる今日に於ても、やはり試験は、時の運と思はれてならず候。

失敗

しかして、昔日の如く、目的の不變なるを以て尊しとし、年齢に係らず、幾度か失敗をかさねてまで、當初の目

文例

理由

的を貫かむとするは、今日に於ては、何等か特種の理由なき限り大に考慮を要すべき事と存じられ候。

猛進す

故に小生この度は、一高醫科及び高商の二校に受験するの心算に候。かく申せば、日頃の言に反して、利益主義に猛進する如く考へらるゝやも計り難けれど、何も學者とか、教育者とかにならざる限り、時世の要求に従ふの方策の得たるものと存じられ候。

悪風

それにしても、近頃新聞雑誌の上には、東都學界の悪風を報ずること頻にして却つて、吾人をして、その事實なるや否やを疑はしむるほどなるが、この際、貴兄の意を叩きて、上京の可否をたづね、且つ、小生にして、醫科、高商などを志望するの如何を伺ひ候はば、貴兄が、永年の

可否

信頼す

東京生活により、最も信頼すべき報道を得べしと信じ、かくは一書を呈上仕り候。

區々

尤も、友人にて在京し居る者もあれど、報道區々、且つまた友情にかられて、或は正鵠を得ざるなきやとも思はれ、失禮ながら、御多忙中、御迷惑をもちかへりみず、この段、御願ひ申し上げ候。

迷惑

ゆるゆる

いづれ、上京拜眉の上、ゆるゆるのお話申すべく候へども、取りあへず、御返報待ち上げ候。早々。

筆記を借りに

休みになつて、始めて、國際公法のノートを披いて見たら、抜けて居ること甚しい。やはり、教へられたとこ

やはり

試験

いたむる

粗末

とにかく

いはぬが

ろは、書いて置かないと、試験の時に困るから、君のノートをね、今日一日でよいから貸してくれ給へな。決して、いためはしないから。

右返事

僕のノートは、字が粗末だから、解らないかも知れないが、とにかく、お貸しするよ。
それから、明日このノートを返す時には、君が来てくれ給へ。
用事は何か、いはぬが花だ。左様なら。

友人を紹介す

雅號
なかなか
ごく
ぜひ
紹介す
風景
詩境
迷惑

この手紙を持って行く、西川小二郎といふ男は雅號を露花といつて、なかなか文才のある男だ。かねて、雑誌などにも、作物を発表して居るが、目下、北海道で新聞記者をやつて居る。ごく淡泊な性格で、おもしろい奴さ。
今度、社用を帯びて上京したについて、せひ君にも遇つて歸りたいといふから、私が、かうして紹介することにした。
北海道で生れて、北海道で人となつたから、頭惱の裡は、広い、冷的趣味に充されて居る。十勝原野の風景や、空知川邊の詩境などは、この男の得意で語るところだ。お忙しいところ、御迷惑か知れぬが、まあ遇つてやつ

文
例

てくれ給へよ。失敬。

青年會に加盟を勧む

拜啓。貴君ますます御學問御熱心の程感服仕り候
 かねてもちよつと座談仕り置き候ふが舊來當地に
 は若衆連とも申すべき青年の一團これあり多少村の
 面目の上に於て生氣の潑洩たるものこれあり候へど
 も未だ日本帝國青年として十分なりとは申されず候
 例へば封建時代に於ける名家の子弟の如く萬事空威
 張的にして内容の貧弱實力の虚弱は免れぬところに
 て候。人間の内容實力を養生せむには須らく精神的
 修練修養をなすべくと存じこの度小生ども發起と相

空威張的
 十分
 面目
 若衆連
 ちよつと
 感服

創設
 もつとし

日進月歩
 發揮す
 本分

何分

成り完全なる青年會創設仕りたく候ふにつき御賛成
 御加盟を仰ぎたく候。もつとも趣意書並に規約は別
 紙の通りにござ候。

しかせばいはゆる従來の若衆連の多少の弊害も除
 かれ日進月歩に従ひて當村青年の面目を發揮するを
 得べく且つ互に親睦にして青年の本分を盡したき目
 的にござ候。

なほ來る十五日發會式執行の見込に候ふ間それま
 では何分の御回音に接したく待ち上げ候。敬白。

右返事

啓。御手紙の趣うれしく拜讀仕り候。

熱心 苦心

大賛成

便利

活動

海嘯

かつ御配布の規約書熟覽いたし候ふ處まことに刻下の時勢に適したる御組織にて尊兄御苦心の程いかにもと御推察申し上げ候。

小生もかねてより同様青年會設立の必要を感じ居りしことに候へばこの舉大賛成の至りにて幸京地の學者方にも多少の知己これあり折ふし招待講演會などにも便利あるべくと存せられ候。

先づは雙手を揚げて賛成するとともに青年會の未來に於ける活動をこれ祈り候。頓首。

義捐を勧誘す

どうです。北陸地方は、ひどい大海嘯でしたね。新

慘事

生靈

荒野 飢餓

落日

聞にも出てましたが、五十年來、あんな慘事がないといふ事です。

さうでせうさ。五萬からの人が死んださうです。からね。

「幾萬の生靈は、殆ど魚腹に葬られ、辛じて生を得たる者も、著るに衣なく、食するに穀を持たず、住むに家なし。漁らむとしても漁具すでに失ひ、耕さむとしても、田畝すでに洗はれ、空しく荒野の間に漂ひて、飢餓に瀕する者、その數を知らず。

濁水の淀まざるところ、人馬の死骸うづたかく、落日、弱くこれを射て、人生の慘事、その極に達せり。

犬に與ふるの一粒の米を以て、人これを救へ。酒を

實際

飲むの資あらば、人、これに恵め」
私は、この新聞の記事を読んで、實際堪らなくなりま
した。

親を失ひて泣く子の聲子を失ひて叫ぶ親の聲、それ
等が、本當に聞えるやうに思はれます。

義同胞
ちようど

君ちようど、あの新聞社で義捐金を募集して居ます
から、私たちも、幾分でも同胞の義務として、出さうでは
ありませんか。

何なら一所にしようと思つて、急いでお手紙を差し
上げます。すぐ御返事を待ってますよ。左様なら。

右返事

酸鼻

果して

寸志

御手紙

さぞかし

啓。仰せの如く、實に酸鼻の至りにござ候。
彼等の運命にして、小生等の上に来らば、果して如何
に候ふべきか。

小生も、幾分の金圓を義捐して、寸志をあらはしたく
存じ候ふまゝ、御言葉に従ひ、お手許まで差し上げ候ふ
間、御手数ながら、御一所に、御差し出しの程願ひ上げ候。
先づは貴答まで。

遊獵を勧む

秋酣に相成り申し候。
野山に住む鳥獸ども、さぞかし、肉附きて、肥え太り候
はむ。

例年のことなれば今年もまた紅葉が岡の邊へ遊獵
如何に候ふや。

小生は萬事準備もでき上り、目下銃の掃除にいそが
はしく候。

一發銃聲樹間にゆらぎて、白煙揚るよと見れば、忽ち
散り敷く紅葉の上に、鳥獸どもの骸を横たへ居る時の
心ちは如何に候ふぞや。思ひ出しても、胸躍り腕なり
申し候。

せひせひ御出獵の儀、おすゝめ申し上げ候。頓首。

周旋せし貸金の催促

拜啓。早速ながら書中を以て申し入れ候。

師走 融通す
しはや
近疎
ほとほと
都合
工夫

さて、餘の儀にもござなく候へども、去る師走の末押
し迫つて、貴君商業上入用融通しくれとお話にて、小
生お氣の毒に存じ、金二十圓、知人より借り合して、御用
立申し置き候ふが、もはや約束の期日も經過し、先方よ
り、返還方催促矢の如くに候。

かねて、懇意の間柄とはいへ、この事だけは近疎を問は
ぬものに候へば、かくして本月も過ぎむには、法律上強
請ども致すやに申し來り、ほとほとてあまし申し候。
貴君も御都合悪しくも候はむも、このあたり御推量
何とか一つ御工夫下されたく願ひ上げ候。
先づは取り急ぎ候ふまゝ、亂筆多謝。

妻を離姻せんとする親友へ

目につきし女房やがて鼻につき。

これは古い川柳の警句だ。

世の中には、缺點のない人間は殆どない。美人でも賢婦でも長い間には、それは嫌な思をする事があるにきまつて居る。

こゝに一人の男があつて、子供までなした妻——しかも立派な妻を離別せんとするに接したら、君は何といふ。

二度目の妻君に、碌な者の來た例は少い。

子供に繼母の愛き目を見せるのも、まさか父の能だ

警句
缺點

立派

まさか

しつかり

一言

ちようど

いるいと

ひよつこり

ともいはれまい。

しつかり頼むよ。

右返事

何にもいはん。只一言、おれが悪かつた。察してくれ。

在京の友への忠告

先日はお手紙有難う。

ちようどあの日に妹をつれて町はづれに散歩に出たら、杉林のそら、君と別れた社の前に出てね、いろいろ過去の嬉しい夢を追つて居ると、ひよつこりと君の

文

例

ふと

近状

真心

貴重

出沒す

父上が御出でになつて、まあ寄つて行けつて、たうとう君のお宅へ伺つたわけさ。いろいろなお話もあつたが、ふと君の噂が出てね、近頃どうしたものか頻に定額以上の學資を要求をされるさうぢやないか。大變心配をされてゐたし、僕も友として、氣がかりでならないから、在京の誰彼に、君の近状をたづねてやつた。——後はいふまい。只君は、君自身の良心の太鼓を打つて見給へ。その太鼓の皮さへも破れて居るとは思はれない。

君。貴重の光陰を空しく浪費し、しかのみならず、紅燈緑酒の間に出沒して、花の如きヤングメンスタイルを誤られな。

待ちに待つ

工合

絶叫

苦痛

村の小學の卒業生名簿には、未來ある少年として優等生たる君の名が記されてある。

光榮ある歴史の前、君が成功を待ちに待つてゐられる老父母の前。

僕は御心配をかけるのが氣の毒だから、うまい工合にいつて置いた。

酒は毒——女は惡魔——

これは、竹馬の友が君への誠心の絶叫である。さよなら。

放蕩なる友へ

山田君、私は、この手紙を書くのが、非常な苦痛だ。苦

文

例

ふしたら

痛といふよりは悲しくて悲しくてならぬ。實は昨晚更けてから私の宅を訪れて涙と共に自分の悴のふしたらを訴へて、どうか忠告してやつてくれと力にもならぬ私までを力にして頼まれた年は五十の坂を越した半白の女がある。

胸裡

私は、その誰であるかはいはぬ。けれども君の胸裏には老先樂しく送らしてと、朝夕願つて育て上げた悴に捨てられて、悲歎の涙に掻きくるゝ、その人の姿が必ずや、はまりつと浮ぶであらう。

はつきり

私たちは若い者だ。酒に酔ひて、女に戯れても悪いとはいはぬ。しかし親を泣かせ兄弟を苦しめてまで、歡樂を追ふ必要がどこにある。どこにある。

歡樂

あとけなし

私は敢て多くはいはぬ。たい君には、

年とられた母上があらう。あとけのない弟妹があらう。先祖からの名譽があらう。

最後

最後に私は、君頼むから止めてくれ。と、只一言いつて置きたい。

洋行せむとして (外國なる友へ)

宏莊なる赤煉瓦の街に輕き靴音を響かせて、異國の文明を思ふがまゝに呼吸するの君を、悶々たる病床の

健全

宿望

夢に想ひ浮べしこと、ここに年餘、今や全く健全なる身となりて候。昨日、山川博士の細密なる診察にて、反應注射の結果、漸く保證致され候。病の癒えたる喜はさる事ながら、なほこの上に喜ばしきは、自由なる一身體について、(す)べてを許され候ふことにて自ら、どうしてよきか解らぬ程に嬉しく存せられ候。

ここに於いて、小生は、年來の宿望を果し、來月下旬、よいよ、君の後を追うて、渡航仕る可く候。二三日來、そのため、家内の混雜一方ならず候。

あゝ、病を逗子に養ふの時、ひとり海邊の砂上に立ち、暮れ行く夕日をながめては、遠く遠く想を萬里の外に馳せて、いひがたき涙に沈みしこと、そのも幾度なり

街頭

面晤

返心

けむ。かくて、そのあかるき街頭の一角に立ち、華やかなる未來を、君と共にうち語らうたる夢に、襲はれしこともありしが、今や月餘ならずして、これを實現にし得る、わが幸福は、實に何とも申しやうなく候。

心躍りて、長く筆取るに堪へず、たゞ、とり急ぎで、御報申し上げ候。いづれ、その地にて、ゆるゆる面晤の上を期し候。不一。

田舎の町より (都の友へ)

啓。さきだつて、つまらなきことうち並べて、亂筆さし上げ置き候へども、御返信これなく候へば、その後の御起居いかゞにかと、陰ながら、案せられ、まことに心も

文

例

健筆

となく存じ居り候。近來村にては君の評判しきりに候。犬一疋居なくなつても、大問題となる田舎のことなれば、さもあるべきことながら、御入社のことより相變らずの御健筆を揮はるゝことまで、詳しく話しかはさるゝは、君にして何人かに、その近況をもらされたるに相違なしと考へられ候。

つれなし

さるにても、小生にのみ、なとて、かくもつれなくあたせらるゝや。御上京以來、もはや四箇月餘とも相成るに、たつた一回のお便り。——それも端書にてなれば、友なつかしむ小生には、不平といはむより、むしろ、お恨に存じ候。

鶴首

君が多忙中に奮闘せらるるは、日々の紙上にての活躍によりて、相解り候へども、お閑もあらば、なにとぞ、詳しく御近況に接したく、鶴首御待ち申し居り候。太三郎君より、君へよろしくとの傳言に候。安達の老爺さんが、今朝死去いたされて候。匆々。

都會の妹に (田舎の兄より)

もう、東京では櫻も咲いたらう。お前が上京してから、夢の間に、はや一年になる。早いもんだな。

昨日の手紙は、家内中が大喜びで、集つて讀んだ。こちらでは、この間から、大工が来て、米倉を増築して

増築

指圖
好材料

居るので父は毎日つきつきりて居る。例の鼈甲縁の大眼鏡で睥めつけては、大工へ指圖してゐる様は、まさに東京バックの好材料だよ。晩方に大工が歸ると、それからが、また一仕事土を掘るやら、こねるやら、やれ水だ、やれ鍬だと、弟が側につききりだ。いつもながらの庭いぢりには困つたもんだ。

辭職

岡田の老父さんは、もう年をとつたからといふので、村長を辭職するといふ。その後を、宅の父になつてくれつて、今朝も村の人やら、役場の人やらが、詰めかけて頼み込んでゐる。父は餘り進まないやうだが、どうしても斷り切るわけには行かまいと思はれる。それに畑は、今年は大變に豊作だ。

好成绩

ほくほく

順境

太助さんに任せてある豚の方も思つたよりの好成绩で、みんなほくほく喜んでゐる。故郷の方は、こんな工合で萬事順境にある。安心して、一所懸命に勉強さへすれば、それで、お前の務はすむわけだ。

誘惑
厄介

お前も知つてゐるだらうが、里の金持の林といふ家の一人娘が、よほど早い頃東京へ出て、何とか女子専門學校にゐたんだが、この頃落第して歸つて來て居る。それに、度々東京から、妙な手紙が來るといふ評判だ。都は誘惑が多いとかねがね、お前もよくいうてゐたな。しかし、お前は、學校の先生のお宅に御厄介になつてゐるのだから、決して誘惑の悪魔など、近寄れよう筈

文

例

油断

現程度

はない。もしあるとしたなら、自ら求めた誘惑に定つて居るんだ。すべて、ものごとくに、一種のうれしさを覺えたとき、誘惑の悪魔は鋭い勢で入つて来るものだ。油断するな。もしものことがあつたなら、それこそ大變なことになるぞよ。きつと立派に卒業して歸つてもらはなければ、父が上京させぬといつたのを、女でもある程度までは、現代の新思想に、接觸せしめる必要があるつて、一人で頑張つて、たうとう許してやつたこの兄が、父や母へ對して、面目ない。腹でも切つて申しわけせねばならなくなるからな。

もし、學校で落第でもしたら、お前も舌でも嚙んで冷い骸にならなくて、は歸るな、きつと。

一體
だらしなく
がぶがぶ

兄は、胸に思ふこと、いひたいことが、まだまだまだ澤山あつたんだが、なんだつたか、ちよつと思ひ出せない。いつでも、これをいつてやらうと思ふことがあつても、仕事シゴトの忙しさに紛れて、忘れてしまふことが多い。今度からは、折にふれ、時にあたつて、感じたことのそのまゝを、お前の爲に書き送ることゝする。

今日はこれで止める事にした。

女の身には、一體病が多いものだから、十分に、衛生に氣をつけて、だらしもなく物を食つたり、生水を、がぶがぶ飲んだりしてはならぬ。

先生へ、末筆ながら、宜しくと、お傳してくれ。別段には、お手紙差し上げないから。

永久
いとよ
なつかし

家庭

兄妹二人ともが、かうしてお世話になる先生の御恩は、われわれ二人永久に忘れてはならぬぞ。兄が東京にゐる頃とは、先生も、大分おかはりなされた事であらうと、いとなつかしく思はれる。今年はどうか一度、手すきの折を計つて、先生への御禮かたがた兄は上京するつもりである。有難い親の御かげで、高等の學問までさしてもらつてゐながら、かうして田舎に埋れてゐるのが、お恥しいやうな氣持がする。お前、お話の序があつたら、兄がかうしてゐねばならぬ家庭の已むを得ない事情を、どうか、先生へよくお話ししてくれ頼むぞ。不一。

雑誌を送つてくれた友に

拜受

清二君。珍しい雑誌、有難く拜受厚く御禮申し上げます。

都を去つて、かうして、こゝへ移つてから、もうかれこれ、二箇月になる。月日は、水の流のやうに流れ去つてゆくものです。

夜風

醫者は、歩るいてはいけなとか、夜風を吸つては悪

散歩

いとか、やかましいことばかりいふので、朝早くにちよつと、裏についた竹林のなかを散歩するのと、晩方に十分位も、小作の老爺でも相手に、細い田畝道をたどる

田園

さき、一日のうちに、ほんとにしみじみ、田園に病を養つ

文

例

活動

實際

てゐると思ふのは、この時だけで、あとはたいさびしい、さびしいで暮してゐるのです。

世の中の荒い浪風も知らず、こんなにしてゐるのが、或は幸福な身なのかも知れないが、いつたい幸福といふものは、牡丹餅のやうなものだ。始の間だけが甘い、けれどもすぐに嫌になる。何か鹽辛いものでも食べたくなる。私も、そろそろ活動したくなつてゐますよ。

毎日毎日同じやうな顔にしか遇はない、私は何か珍しい人でもと、待つてゐたが、郵便配達夫が君からの雑誌を、ほり込んでいつてくれた時は、實際涙が出る程に嬉しかつたです。

すぐもう息もつかずに読んで終ひました。始は、一

編輯

奇抜

豫期

日に、少しづつ読んで、永く楽しまうと思つてたんですが、ちやうど喉が乾いてゐるのに、綺麗な清水を見つけた時みたい、その水が涸れるまでに吸み出さなくては、どうにも気がすまなかつたのです。

誰の經營か知らないが、おもしろい編輯です。作者の名前を、六號で入れたのなどは、奇抜だと思ひます。願はくば、健全なる發達のあれかしと祈ります。

君の作品は、どうして載せなかつたのですか。實は、帯封を切るときに、必ず何かのつてゐるなと豫期したもんだから、少からず落膽しました。次號には、せひ何か書き給へ。

私も、近いうちには、どうしても都の人になりたいと

文

例

漂ふ

思つて居ります。
いま私の住むさびしい空は、火事のやうに紅くなつてゐる。今夜は、そつちも、こつちも、麥焼で忙しい。私の家でも、みんな出かけてゐます。どつからか若い女の歌聲が漂うてきます。君の壯健を祈つてゐます。さよなら。

端書だより

たどる
さわさわと

一、石に腰かけて、旅から旅へと、今日は箱根の細道をたどる。石の上で辨當を開いた。涼しい風が、さわさわと竹の葉をゆすぶるのが見え

新緑

る。新緑の香が皮膚から骨から、身體中すつかりと泌み込んで来るやうだ。私は氣も心も、全くの平穩な情態にある。出来ることなら、いつまでもいつまでも、どろろにかして、かうして居たいやうな氣もちがする。今、ここで、何か、スケッチをやらう。歸つてから、見せもせう、語りもせう。

二、今日の豫定は十六里

この地から下田までは、十六里あまり。途中の道は、それはそれは険しいさうだ。もう、かうやつて歩き出してから、一箇月半もたった。友だちのうちには、忘れて終つた者もあるだらう。

それはそれは

實物

古蹟

決行

直談

地獄

三、下田港より
この繪端書は、下田の全景。寫真よりは、實物の方が
ちつとは賑かだ。
これから、古蹟を探らうと思ふ。

四、船員となりし日に

いよいよ決行した。已むを得ない。金は、もう一文
もない。今日、船長にあつて直談して、まづ水夫の格に
なつた。
なんだか知らないが、船長がどつかで遊んで來いと
いつて金をくれた。
これからは、板子一枚下が地獄だ。

御清榮

忙殺

延引

思考

この船は、サンフランシスコに通ふよ。
遙に、君の健康を祈る。

上京せんとする友に

拜啓。皆々様、ますます御清榮の由、賀し奉り候。
さて、去る七日附のお手紙、まさに拜見仕り候。早速
御返事申し上ぐべき筈のところ、昨日までは、進級試験
に忙殺せられ、日頃の怠者なれば、寸閑も得難くて、つひ
つひ、本日まで延引いたし候ふ段、悪からず御思し召し
下されたく候。

御手紙によれば、御上京御希望の由に候へども、この
事は、大なる思考を要することにて、なかなか一時の出

生意氣
無遠慮

至極

來心きこころなどにて相定あひまめ得べきものにあらす。もし、一步を誤あやまれば、一生しやうの誤あやまりとなりて生涯しやうがいを暗黒あんこくなる迷路めいろにさまよふに至いたること、世間せけんその例少れいすくなからずと存ぞんじ候まうふにつき、甚はなはだ生意氣なまいきがましく候まうへども、貴君きくんの御爲おためを思おもひて、誠意まこといを以もつて、萬事ばんじ無遠慮むえんりよに、御返事ごへんじ申し上げ候まうふ次第しだいよろしく、御含おんたくみ下くださるべく候まう。

貴君きくんは、目下めいげ中學ちゆうがくに、御在學ございがくのことゝ存ぞんじ候まう。此度このたびの學期試驗がくきしけんの成績せいせきも、好良かうりやうなりし由よし、愚弟ぐていよりの通知つうちにて、かねて、承知しょうちまかりあり候まう。この良好りやうかうなる一學期がくきの成績せいせきを捨て、御退學ごたいがくなさるゝは、まづ以もつて、小生せうせいの不心得ふこころえ至極しごくと存ぞんじ候まう。

御承知ごしょうちの如ごとく、高等學校かうとうがくがうは、勿論もちろん、私立しりつりつの大學だいがく、專門學校せんもんがくがう

影響

中途

得策

に至いたるまで、中學校ちゆうがくがう卒業そつぎやう者しやならでは、入學にやうがくの許可きよか相叶あひなひ申まをさす。もし、許可きよか相成あひなるも、別科べつことか、乙種生おつしゆせいとかいひて、それが、卒業そつぎやうまでも、少すくなからず影響えいぎやう仕つかまつり候まう。殊ことに貴君きくんは、明年あつねんは、徵兵適齡ちゆうへいしゆくのことなれば、別科べつこには、この特點とくてんなきが故ゆゑに、或あるひは、學業がくぎやうの、中途ちゆうとにして、退學たいがくの已やむを得えざること、出來しゆつた致いたすやも、計はかり難がたく候まう。

小生せうせいは、何なにに致いたせ、君きみが、中學卒業ちゆうがくそつぎやうの上うへにて、御上京ごじやうきやうの可否ひかを決けつせらるゝが、得策とくさくと考かんがへ候まう。

尤もつとも、東京とうきやうには、夜學やがくの專門學校せんもんがくがうもこれあり候まう。間晝あひだひるは、中學ちゆうがくに通かよひ、夜よは、乙種おつしゆの學校がくがうに通かよはれぬこともなけれど、これらは、所謂しゆゑん、勞多らうおほくして、功少こうすくなしの類るいに候まうふべしと、愚察ぐさつ仕つかまつり候まう。

満足に

参考

合格

それに、君は、いまだ御年も若く、學資も十分なり、なにもさう御いそぎの必要はなく、順序ある階段を登らるるに、一も願慮せらるゝことはなかるべしと存じ候。たつた一年にて満足に御卒業なさるべきことなれば、それまで、靜に御在郷、御勉強專一の程念じ上げ候。別封、垣内博士著の學修法一冊、小生手許にこれありしもの、御覽に入れ候。御参考に供せられたく候。謹言。

兄とたのむ舊友に

私は、また、合格が出来ませんでした。あなたのことは、始終思ひながら、近頃はつひ、學科に

不合格

自白

あこがる

追はれて、非常な御不沙汰、おとがめ下さいますな。お別れしてから二年になる。そして、こんな恥しい、悲しい報告も、二度重ねたのです。私は、かうして、入學試験に不合格だったからって、そんないひわけをして、も、あなたは、ふふんと笑つて、『勉強が足りないからだ』と、きつといはれることでせう。

實際、私は勉強が足りなかつたことを、深く自白いたします。櫻の花が、雪のやうにちらちら散る、隅田川の邊で、朝から晩まで、暖い春の南日を受けて、たつた一人、詩集を手にして、的もない心の躍るやうなサムシングに、あこがれ耽つたこともあり、夏は鎌倉に、一箇月も遊びました。しかし、この時は、勉強をするつも

掉歌

りて、書籍を澤山持つて行ったのですが、やはらかい浪の音が遠くかよふとき、漁夫の掉歌の近く響くとき、私は、どうしても書籍などに見て居られず、宿を飛び出しては、さうしていろいな詩の影を追つて追つて追つて追ひ疲れて、歸つて來ては、寝てしまつてゐたのです。思へば、つまらない月日を過しました。

私は、この手紙と同時に父にも、同じ悲しさを報告せねばなりません。父は、きつと怒るでせう。母は、きつと泣くでせう。私は、ほんとに面目ない失敗を重ねたのです。

私は、もう今度は断然、受験の準備は廢めて、私立大學へ入學することに決めました。そして、早く専門の研究

断然
専門

あさはかな
虚榮
あこがる

究をして、活社會の人となるにつとめます。

官立學校の學生——考へて見ると、この希望は、あさはかな、一の虚榮に過ぎませんでした。學士の稱號にあこがれてゐたのは、全く、一時の興奮に過ぎなかつたのです。

と、いつて、私は、再び、不合格の悲しさを、くり返すのを恐れたのではありません。この點は、信じて下さい。

もう私は、この上には、何事にも沈黙する。そして、沈黙の中に、自分の、すさんだ運命の畑を、開拓して行きます。

いま私の心は、或は、感情に走つて居るかも知れませんが、しかし、安心して下さい。一度きつと放たれた

沈黙
すさむ
開招

文

例

矢は、的に向つて折れるまで進んで行く——伸びやうとする勢力が漲つて居りますから。君の御自愛を遙に遠くから祈り上げます。

旅に出た兄に

兄さん。こつちは今日は、ひどい風が吹いて塵や埃が黄ろい烟のやうに立ち迷つてゐます。私は、やはり朝から兄さんのお部屋へ入れて頂いて、学校の復習をしました。

お晝頃に、美枝姉さんと、正雄さんとが遊びに来てくれて、僕が居るもんですから、みんなお部屋へ入つて、一時間位いろいろなおもしろいお話を致しました。

復習

別荘

そしたら、美枝姉さんが、正雄さんと一所に、明後日、僕を、鎌倉の伯父さんの別荘へ、つれて行って下さるといふから、僕、うれしくつてうれしくつて、すぐ母さんにお願したら、いいつてのですから、もうもう、今から愉快で堪りません。

その時、美枝姉さんへ、兄さんが、去年、學校を御卒業の時に撮したお寫真を見せたら、だつて見せておくれつておっしゃるんだもの、一枚いたゞいて行くつていっただけれど、僕、兄さんから叱られるつて引つたかつたら、少しばかり、表のそこへ、きすがついたの。僕だけ悪いんぢやないんだから、許して下さいよ、ね。それから、兄さん、お父さんは、廿五日の朝に、上野へお

大變
都合よく

寫生

展覽會

著きなさるつて、北海道から知らせがありました。仕事の方は、大變都合よく行つたんだつて。兄さんは、いつ歸つて来るのですか。お知らせ下さい。きつと、僕の約束の繪は、書いて来て下さいね。僕のは、あの富士山の寫生ですから、忘れないでね。今年の展覽會で、兄さんの繪が一等賞をとつたら、お母さんが僕にも、繪の具を買つてくれるつていつてますから、しつかり勉強して下さい。

鎌倉から、また、おもしろい手紙を出します。さよなら。

森林から

尊者

愛讀

沈黙

教壇

しばし、うき世のうるさき巻を遁れ得たる僕は、今緑滴る鬱蒼たる、この森林の中に立ちて、日頃愛讀する詩集をひらいて、それが第一頁に讀み入り居り候。

小さき、狭き紙の上には、茂り深める葉と葉の間を洩れし、日光の細き流が、やはらかに落され居り候。この趣や、實に、詩以上の詩にして、しかして、林中の静けさ、また、人を殺せし後の沈黙の如くに候。たいもの足らぬは、傍に君なきの一事に候。

中學を出でて、君は、高等の學校に進み、僕は、小學の教師となりて、さびしく、この田舎に埋る。運命の然らしむるところ、みづから、その如何ともする能はざるを知るといへども、しかも、教壇に立ちながら、そゝる悲しき

文

例

天職 感興

胸の波動に、われにもあらで、聲うちふるはせて、人にあやしまれしこと幾度なるを知らず候ひき。しかし、もう、それも馴れてしまひ候。しかして、今は、これをしも、自己の天職なるかのやうに感ずるに至り候。帝都の御朝夕、おのづから、感興の多きがおはすべし。折々に御近状もらし給はむことを願ひ上げ候。頓首。

木蓮咲く日に

啓。庭前の木蓮今を盛りに候。赤紫の濃く、毒々しき色ながら、すべて花の開きたるは何となく、心ちよきものにて候。それに、椿も、われ劣らじとばかり、少女の唇のやうな

色めく

得意

無想像

苦痛

る花をつけたれば、日頃は、さびしく荒れはてしわが小庭も、目下は俄に色めきわたりて候。櫻の折には、小さくなつて、部屋のうちにもぐつて居り候ひしが、けふこの頃は、小生、こゝ暫くの大得意。寸暇もあらせば、御來遊下されたく、花には露を含ませて、お待ち申し上げをり候。不一。

開店第一日に

啓。商賣は、眞實おもしろきものにて候。兄上の御想像の如く、無味にして困難なる事には候はず。否むしろ、趣味多くして、容易なるものと感じ候。家内全體の不賛成には、資本の上にて、大なる苦痛

文

例

覺悟

商品陳列
餘儀なし

を感じ候ひしが妹と二人の貯金總額を擧げて、どうやらかうやら間にあはせてしまひ候。一錢あつても、資本はやはり資本に候ふ間覺悟次第にて、どうでもやつていけることと存じ候。はゞかりながら御安心下されたく候。

しかしながら妹の嫁入支度の金まで叩き出させ候へば思へば、かはいさうに候へど、これがやがては何十倍になるやも知れずと、目下妹も大働きに候。何しろ資本が資本に候へば、いまだ店の飾など十分とは參らず。商品陳列の四分通りは、空箱空罎にて候。これも、しばしは餘儀なく候。本日は、早朝より開店國旗や新しき暖簾などにて景

萬端

ににに

融通

氣をつけ、店頭掃除も綺麗にして用意萬端ぬかりなく、小僧どもにも始の間の大切なるをいひ聞して、今や遅しと待ち居れば、十時頃より目の廻る程なお客にて妹も絶えずにこにこ顔お世辭などふりまき居りしが、いま少しひま故賣上高を檢せしに、六圓七十五錢五厘思つたよりの好成绩に候。

とにかく萬事好都合、この分ならば妹の資本は、近々のうちに返せるだらうと考へられ候。兄上よりの開店祝妹ともども待ち居り候。かういふ時に祝つて置いてくれなければ、やがて二人で銀行を建て候ふ節は、兄上には融通お斷り申し上ぐるやも、計り難く候。呵々。

文
例

兄の病状をしらす

口走る

油断
専心

心もとなし

來診

拜啓。一時快方に向ひたりし兄の病氣、二三日來、またまた引き返して、體温八度七分まで上り、睡れば、とりとめもなき嘔語をのみ口走り居り候。

看護婦の言によれば、こゝ一兩日は、少しも油断のならぬとのこと。皆々、徹宵枕邊に侍し、専心看病いたし居り候。

食物は、スープ、牛乳、お湯、葛湯など、すべて、流動液體のみに限られ候へば、何となく、顔のやつれ、眼につきて、心もとなし候。

本日午後、本庄學士來診、肺炎併發の由を語られ、一同

別状なし

共編
著述

亂筆

暗き思に、たゞ顔を見合すばかりに候。

しかしながら、この一兩日を無事に過せば、生命には別状なかるべしとのこと、何にしても、この一二日が大切に候。

折々、大兄のことなど申しては、病み疲れたる頬に、さびしき笑を浮べ候ふこともこれあり候。

それから、大兄と共編の著述のこと、大分氣にかゝるやうすに候。

只今國元より、父母も來り取りこみをり候ふまゝ、亂筆、御免下されたく候。勿々。

病床より

文
例

健康體

啓。枕元なる病狀表により、床についてより、けふはや、十一日になりぬるを知りて驚き申し候。妹にいひつけて鏡を見れば、髻は延び、肉は落ちて、眼の窪みたる様わが顔ながら、氣味わるく候。腕をさすれば、骨ばかり、油氣失せて、人間の肌とは思はれず、残念至極に候。

本日より、やうやく飯を食ふを許され、管と匙にて、液體物をのみすゝりをり候。ひし不快の中、から脱れ出で候ふこと、しみじみ嬉しくして、茶椀に二盃、鯛の刺身の一盃を平げし時のうれしさ、何とも申しやうなく候ひき。

體温は、卅七度二分位を上下し、殆ど健康體と同一に

病人扱

病室
雨戸

快談上

ござ候。

かうして寝てゐると、朝新聞を見るのが、何よりの樂みにて、はては廣告欄に至るまで、一々讀みつくし候。しかし、家内中が、まだ、全くの病人扱にするには、弱り申し候。今朝ほども、喉が濁くから、御茶をといへば、母が黙つて牛乳をくれるに候。嫌になつてしまひ候。病室の雨戸を開くれば、御存じの小庭、飛石の間に、躑躅の花の燃ゆるやうなるが見ゆるは、いさゝか病に衰へたる心の悩みを慰めくるるものに候。この月末には、きつと、床上いたすつもり、その折は、久しぶりにての快談、うかいひたくせひせひ御出願ひ上げ候。不一。

文

例

父の看病を頼みたる人へ

苦勞

拜啓。病全く癒えざる父を、一人さびしき故里に捨て置き、かう都に學ばざるべからざる、小生の苦衷、御推察下されたく候。

準備

日一日と、風暖くなり行けば、櫻もいつか散り行きて、上野、飛鳥山も、やうやく人出少く、東京も既に夏と相成り申し候。

近況

近筆

小生、學期試験にあたり、その準備のため、殆ど寸暇もなく、意外の御無音にうち過ぎ候。故郷の近況、大兄の御近状など、かげながら、御案じ申し居り候。昨日、妹の代筆にて、父よりの書翰、これあり、あらまし

誓願

諒承いたし候。

それによれば、大兄、相かはらず、御壯健にて、御奮闘の由、心から賀し上げ奉り候。大兄の御親切について、父は、次のやうに申して参り候。

勿體なし

山口様の御親切は、この身にとっては、涙の出る程だ。お忙しい中を、お前への義務だなどと仰せられて、妹に力を與へて、親身も及ばず、老いつかれた、わしの病の看病をして下さるぞよ。わしは、實際、勿體なくて、お氣の毒で、何とも、御禮の申し上げやうがない。

くれぐれも

お前から、くれぐれもよろしう、御禮を申し述べてくれ。

文例

卒讀す

歸省

客體

小生は感極つて卒讀するに堪へず候ひき。
 大兄よ、小生は満腔の誠を捧げて、この大兄が御慈愛御親切を感謝するに候。
 いづれ學年試験すみ次第早速歸省いたすつもりに候へば、この折、まのあたり御禮申し上ぐべく候。
 大兄の御親切なる御看病によりて、父は非常に快方に向ひたるよしに候ふが、父の書には醫師の言などは、何とも書き添へ参らず候。容體はいかゞのものにて候ふやらむ。何にしても、病氣が病氣故思ふやうに参らざるは知り居り候へども、いまだ全快までには、よほどの時日を要するやうに候ふや。もし何なれば、當方にて、小生の親しき友の兄なるが、今年大學醫科を卒業

自愛

するものあり。都合にては、参りくれてもよろしとの事なれば、はかりながら、右に對しての大兄の御考、ちよつとお端書頂戴いたしたく、願ひ上げ奉り候。
 まづは、時節がら、御自愛專一に念じ上げ候。敬具。

文

例

實用新書翰文
終

三〇六

明治四十五年六月八日印刷
明治四十五年五月廿一日發行

實用新書翰文與付

定價五拾錢

內海弘藏

東京市本郷區森川町壹番地

貞金近松

東京市神田區三崎町三丁目一番地

武井万二

東京市神田區三崎町三丁目一番地

日本印刷株式會社

電話本局二益一八六

東京市本郷區森川町壹番地

文成社

振替東京一九四六七番

電話下谷三〇一一番

復製を許さず

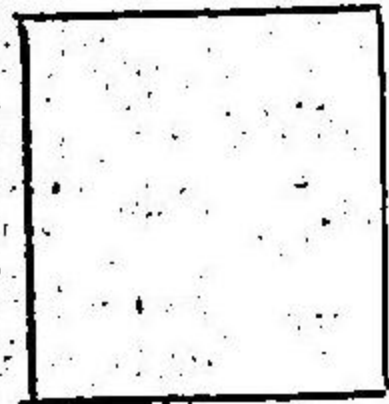
著作者

發行者

印刷者

印刷所

發兌



橋 弾 碁 君 著

小 杉 未 醒 君 戲 書

番 茶 一 杯

滑稽畫を以て當代類ひな
き小杉未醒君の戯畫挿繪
十數葉は本書の内容と相
俟つて一代の珍觀なり

正 價 三 拾 五 錢
送 料 六 錢

大に笑はんと欲するものは本書を讀め!!

滑稽にもいろくあり。所謂くすぐりや駄洒落、語呂な
どは下等の部に屬す。下卑がかつたもの、猥褻なるもの
は士人士の讀むべきものにあらず。

自然に出づる滑稽!! 眞面目なる滑稽!!

臍の下からむくくと持たげくるをかし
さ、抑へんとしてをさへられず、思はずウ
ワツ、と吹き出す滑稽こそ、その上乘な
るものなるべし。

本書を讀まんほどの人は臍の皮のよれ腮のはづるゝも厭
はざるの覺悟あるべし。番茶を吹き出して鼻のさきに茶
殻の飛びつかざるやう心がくるこそ肝要なれ。

眞の滑稽を味はんとする者は本書を見よ!!

著新生先象義邊池京都帝國大學
國師講學大

少年史談

◎入葉數拾畫挿本美頗裝表刷度數版石判菊◎

錢四料送錢拾貳價定冊各冊二十全

編三第

編二第

編一第

神の御聲
智の光
義勇の譽

宮川春汀挿畫

劍太刀
悲雨の金崎
落花の吉野

濱田如洗挿畫

宰府の飛梅
加賀の老松
二天一流

井川洗厩挿畫

以下續刊
(毎月發行)

明治大學講師 文學士 内海弘藏先生新著

忽再版

戰記文評釋

三六判總クローヌ
頗美本函入
正價金八拾錢
送料 八 錢

古雅に流れず卑俗に陥らず聞々漢文の精粹を巧に國語化し情趣ありて而かも内に稜々たる意氣を藏し其叙述の自在にして曲折波瀾の妙を極め其字句の堂々として熱烈慷慨の氣紙面に溢れ虎嘯龍搏の光景を眼前に彷彿たらしむるものは我中古の戰記文なりとす

本書は保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記、太平記等傑作中より其最も面白き箇所を拔萃し之に國文の泰斗たる内海先生が得意の評釋を加へられたるものなれば單に讀みものとして趣味の津々たるのみならず文章研究家には絶好の指針たらむ

文學士 野上豊一郎先生
文學士 野村傳四郎先生
文學士 水島耕一郎先生

共編

◎歡迎湧くが如し

忽三版

和英作文辭典

袖珍五百六十頁
天金付頗美本函本
正價金六拾五錢
送料金 八 錢

分類	新
文字	適切
文章	明確
搜索	簡明
作例	豐富

英作文に尤も必要なるものは「イデオム」を充分に識つて居る事である、然るに此「イデオム」は短日に充分に知ると云ふ事は到底不可能の事である、故に是れ迄唯一の頼みとして用ひた和英辭典の類は只單に單語や熟語を知り得るのみでイデオムを知る事が出来なかつたから出来上つた文章は不完全なる日本的英文で外國人には分らないものが多かつた。

本書は未だ曾つて類例なき科學的分類法に依つて和英兩文を對照して「文字の用法」及「イデオム」に就て遺憾なく説明を加へたれば如何なる初學者も正則に英文を作ることが出来る特に學生諸君にとりては絶好の新辭典である。

男爵 澁澤榮一閣下 述

版三 富源の開拓

菊判上製函入
正價壹圓卅錢
送料拾二錢

岡谷 繁實先生 著

版三 南朝の元勳

菊判上製函入
正價壹圓廿錢
送料拾錢

米國 マーデン氏原著 文學士 藤井黙花先生譯

版再 偉人と修養

四六判洋裝美本
正價四拾五錢
送料六錢

文學博士 井上哲次郎先生序 秋山悟庵先生著

版三 青年と禪

四六判洋裝美本
正價五拾錢
送料六錢

文學士 吉九一昌先生 編

版再 修養夜話

菊半截美本
正價參拾錢
送料四錢

文學士 成田秀三先生
文學士 堀田相爾先生 共編

文章辭典

忽ち七版

想ありて而も筆之に伴はず、情あるも文之を表はすことを得ず、是れ蓋し文章を書かんとする者の先づ發する嘆聲なり。稀世の名論も適切の文字を知らざれば以て世に傳ふる能はず、天然の美も美辭麗句を以てするに非ざれば、豈能く之を描くを得んや。本書は著者が多大の苦心を以て古今の名著名文より金玉錦繡の辭句を蒐集し、之に細密なる分類を施し以て索むるに容易ならしめたり。故に本書を机上に供へたらんには、如何なる想も、如何なる情も、將又、如何なる美譽も思ふ儘に描出することを得て名文立どころに成るべし

總クローヌ金文字入
正價四拾五錢 送料六錢

- ▲辭句の排列には特に意を用ひたり
- ▲新式の分類をなし索引に便にせり
- ▲讀難き文字には悉く假名を附せり

源光行譯著 加納諸平作歌 千勝義重先生校註

忽再版

和譯蒙求

三六判凡五百頁
天金箔付頗美本函入
正價九拾錢
送料八錢

蒙求は支那唐代の李翰が廣く故事を編輯して童蒙に便したるものにて而も此和譯は今より七百年前即ち後鳥羽上皇時代に成れる筆路流暢多趣味の名著今や數種の珍本に據りて校訂を施され特に譯文對照以て讀誦玩味の便を計れるが故に取つて之を北窓淨机の上に緋かば精神修養の好侶伴たらん。

文學士 内海弘藏先生新著 ◎四六版正價五拾錢送料六錢

忽三版

實用新書簡文

本書は新時代の要求せる新しき形式に従ひ文章の大家内海先生が最近のあらゆる新題を網羅し最も實用に適するやうに編著せられしものなれば如何なる人も日常座右に供へ置かば其便利と利益は蓋し莫大なるものあらん。
簡潔にして要領を得たる手紙は成功の秘決也

文部省習字檢定試験委員 裕川雲谿先生書 ◎横帖美本正價四拾錢 送料四錢

手紙と葉書

根本的拾七版
本書は日用の熟語を「いろは順に綴りて題となし、それに簡潔なる書簡文を附し、先生獨特の名筆にて揮毫せられたるものなれば書簡文兼用の習字手本として稀れに見るの好著なることは蓋し異數の賣れ行きに依て明かに證明せり

57

文學士 若月保治先生著 ◎四六版正價二拾五錢送料六錢

忽六版

英語 獨習 手ほどき

本書は英語教授に就て、多年苦心經驗ある若月先生が初學者の爲めに新案の方法に依りて最も平易懇切に編著せられたるものなれば、全く一字も解せぬ者でも本書一冊讀み了れば普通の英語は自由自在。

池邊義象先生 関市原隆作先生著 ◎四六版美本 正價八拾錢 送料八錢

忽八版

悲壯 史蹟 屋島と壇の浦

平家の末路——之れ自然美と人間美との結合して作り出せる一大悲壯劇に非らずや。本書はこの大悲壯劇を叙し去り叙し來り讀者をして壯絶悲絶の光景を目前に躍如たらしむ。



文成社



文成社

實用
新書
翰文

特19

106

080076-000-1

特19-106

實用新書翰文

内海 弘蔵/著

M45

DAC-4208

